わがパウル・クレー展覚書

パウル・クレー：死者と未だ生れざるものの間に

今回のパウル・クレー展はパウル・クレー Paul Klee(1879−1940)の作品28点を展示しご覧いただくものである．展示作品の内容は水彩10，油彩等ミックストメディア1，テンペラ1，オイルステック1，ドローイング2，版画13(うちエッチング5，リトグラフ8)で，制作年代は1903年の「樹上の処女」(エッチング)から1940年の「一種の高層建築」(オイル・スティック)まで，クレーの制作活動の全期間をほぼカバーしている．今年(1990年)は丁度クレーの没後50周年に当るのも奇しきめぐり合せと言うべきか？クレーは1940年6月29日ベルンで亡くなっている．

当画廊のパウル・クレー展を記念し，この展覧会カタログのほか，瀧口綾子夫人，関係出版社のご了解を得て瀧口修造「パウル・クレー論集」を刊行するとともに1990年カレンダー(クレーの作品6点を収録)を作成した．また展覧会の会期も2ヶ月とした．

展覧会のカタログについては，巻頭に大岡信さんの『ぼくのパウル・クレー』と題する詩2篇〝クレーのまちの遠景〟，および〝クレーの店〟を掲げることができたのはうれしいことである．オマージュ・クレーにふさわしい素敵な詩である．評論については多年クレーについて研究され，わが国におけるクレー学の第一人者である土肥美夫さんに「探求の画家パウル・クレー」を，また若き評論家水沢勉さんには「解体の果てにみえるクレー −パウル・クレーの「アフロディテの解剖学」をめぐって− をそれぞれご寄稿いただいた．前者はクレーの全体像を示す総論であり，後者は作品個別論である．両々相まって，クレーの理解はさらに一層深められることとなった．詩，評論とも心のこもった力作であり，このクレー展はさらに厚味と輝きを増すこととなった．ご三かたに厚く御礼申し上げる．

カタログには展示作品をカラー写真で収録し，水沢勉さんの編集によるクレーの年譜ならびにクレーの写真31点を掲載した．このクレーの写真は正木博さんのご好意によるものである．展示作品についてはデータ，出所，展覧会歴，参考文献等可能な限り収録した．

この展覧会を機に，瀧口修造「パウル・クレー論集」を土渕信彦さんの編集で，解題を付して刊行した．その経緯について若干申し述べておきたい．当画廊でクレー展を開催することを知った私の若い友人で熱烈なる瀧口修造ファンの土渕さんが瀧口修造のクレーに関する論評を調べたところ，詩1，評論8，クレーの論文の翻訳1計10篇が存在すると私に教えてくれた．私は瀧口先生がクレーを敬愛しておられたこと，また「画家の沈黙の部分」「幻想画家論」等にクレー評論，エッセーがあることは知っていたが，これほど多いとは思いもよらず，驚いたのである．どちらが言い出すともなく，これは一冊の本にまとめるべきだ，と言うことで意見の一致をみた．その解説はあなたが書くのが最適だと土渕さんにお願いし，未発表のクレーの詩の翻訳および，クレーに関するその他の小文等5篇を加え，ここに「パウル・クレー論集」が誕生したのである．

土渕さんは銀行員であるが，瀧口先生の著書の読みの深さは抜群で，私などその足下にも及ばない．この解題は単なる著書の解題に止まらず，クレーを通して瀧口修造を語る趣となり，ひとつの瀧口修造論と化しているところに注目したい．銀行での激務のかたわら，この労作をものにされたその情熱に感服する．この本は近くみすず書房から刊行予定ときく瀧口修造全集のワンステップとしての意味も大きい．すなわち，このクレー展は期せずして当画廊恒例のオマージュ瀧口修造展の番外篇となったのである．

このクレー展の作品は当画廊がほぼ3年がかりで収集したものが中心をなしている．入手先はニューヨーク，ロンドン，バーゼル，ミュンヘン，東京の各地である．去る3月1日，私は土肥美夫さんの紹介で，女房とともにベルンの自宅にフェリックス・クレーさん(パウル・クレーの御子息)を訪問し，このクレー展開催の挨拶をした．当画廊のコレクションをチェックをしてい

ただくとともに，4部屋に飾られているクレーの作品を拝見し，3時間ばかりお話しができたのは幸せであった．また，この11月8日には丁度伊勢丹美術館で開催中のクレー展のフェリックスコレクションのため来日中のアレキサンダー・クレーさん（フェリックス・クレーの御子息）が当画廊にお見えになった．クレーの作品をひと通りお見せすることができたのは幸運であった．

さて，クレーは生涯にわたり何点作品を制作したか？フェリックス・クレー著「パウル・クレー」矢内原伊作・土肥美夫訳，みすず書房，1962年刊（P．204）によると次のとおりである．

布地の彩画	761	8．3
紙地の彩画	3，263	35．7
デッサン	4，966	54．3
エッチング	62	0．7
リトグラフ	39	0．4
木版画	3	0．0
彫刻	52	0．6
	計9，146点	100 ％

年ごとに制作作品数をみると特徴的なのは1936年が25点と著しく少く，1939年は1，253点と圧倒的に多い点である．前者は病気（皮膚硬化症）によるためであるが，後者は1940年の死を予感しての制作としか，そのすさまじい制作量を説明することができない．

また，同著によるとベルンのクレー美術館2，891点（うちデッサン2，250）フェリックス・クレー氏413点の所蔵と記録されている．欧米の主要な現代美術館は必ずと言ってよいほど，クレーの作品を収蔵しているが，その明細について私は詳かにしない．100点を越えるコレクションは，前述のほかはデュッセルドルフのノルデライン・ヴェストファーレンM，メトロポリタンM（ベルグラン氏の寄贈），それにパサデナのノートンサイモンMも相当な作品数であった．以上は私の実際に確認したコレクションであるが，このほかにも隠れた大コレクションがあるかもしれない．

さて視点を今回の当画廊のクレー展の作品に戻そう．まあ，現在の私として空前ではあるが精一杯のところである．というのが正直な感想である．各々の作品について若干のコメントを付けたいとも思ったが，都合により省略した．ただ次の2点だけ補足しておきたい．

第一は「アフロディテの解剖学」カタログNo．6，についてである．この作品については水沢さんから精緻な論稿をお寄せいただいているが，私はこの作品は「橋のそばの三軒の家」カタログNo．15，と並び，今回展示の水彩画のなかでは白眉の優品だと思っている．問題はこの作品の両翼図が伊勢丹美術館のクレー展（1989．10．26～11．21）で展示されていたことである．その両翼の中央部が，当画廊に現存するとは信じ難い事件である．この両翼図について作品解説をされた前田富士男さんが，中央部は行方不明である，とされていることからも，これは東京での歴史的ランデブーであると言えよう．隣に置いてみたい誘惑にかられるのは私のみではあるまい．

第二に「熱狂する人々」カタログNo．26の作品であるが，この作品の裏面に未完成の別の作品が隠されていたことをお知らせしておきたい．この作品は1962年以降わが国に存在した作品であるが，表面が幾分汚れていたので，台紙をはずし，修復してもらった．ところが修復を担当した小林基輝さんから裏面に未完成の水彩があると知らされ驚いた．もし完成しておれば素晴しい作品となっていたであろう，と思われる水彩である．これをアレキサンダー・クレーさんに見せると，クレーは時々こういうことをやっています，とのことであった．つまり途中で放棄した作品の裏面にこの「熱狂する人々」を描いたのである．なぜ放棄したのか？これは分からない．クレーのみがそれを知っている．そこでまず台紙を保存し，その台紙のコピーを切りとり2つの作品がみえるように特別のフレイムを作成した．この長らく隠されていた未完成ではあるが，甚だ魅力的な作品をお見せすることが出来るのは大変うれしく楽しいことである．

さて，私にとってクレーとは何か？この問には昔から私には答は用意してあるのである．私の美術開眼であると．昭和22～3年頃，金沢の街で求めた美術雑誌のなかにクレーの作品を見つけて，心をときめかせた．粗末なカラー印刷でみたクレーは私の心に，何か自分ではよく分からないが，別の世界があることを暗示してくれたのである．

私はクレーを通して現代美術の世界に踏み込んで行った．セザンヌ，ピカソおよびブラックのキュビスム，抽象絵画，アメリカの抽象表現主義等々その面白さが分かる前に，私にはクレーがあった．そして今改めてクレーをみると，クレーは入り易いが，実は奥が深いのである．

1920年のクレーの日記の一節で，クレーの墓碑に刻まれている次の言葉は私に深い感動を与える．

この世では理解されるすべのない私．私は死者と未だ生れざるものとの間に住んでいるからである．創造の核心には常よりもやや近く，しかし，道はまだはるかである．

人間をあるものとあるものとの中間に存在する者として規定する考えは珍しくないが，死者と未だ生れざるものとの中間者であるとするクレーの思想は私の胸を打つ．この世のものではない空気を感ずる．ほの暗い宇宙的な空間に創造の光がみえ，その光に導かれて進む作家の姿はまさしく探求の画家パウル・クレーその人である．孤独な世界を経験しない，またはできない作家は，結局作家として存在し得ず，創造の世界を知ることはできないであろう．孤独の世界に身を置き，謙虚に，静かに，自信をもって自分の道を進んで行ったクレーに私は強い感動を覚えるのだ．翻って私のごとき怠惰な精神の持主は，とてもクレーの住んでいる世界には住めそうもないことを先刻承知している．承知しているだけに私のクレーへの憧憬のおもいは一層深いのである．

最後に，この展覧会開催に当って，多くの人々の協力を得た．改めてお名前は記さないが，心から御礼申しあげる．ありがとうございました．

1989年11月20日

佐谷画廊
佐谷和彦

［追記］

土肥美夫先生が，昨日早朝，急逝されたとの報せを受けた．享年65歳．数日前，原稿の校正のことで先生と電話で話し合ったばかりである．お元気な声であった．この信じ難い現実に，しばらくは茫然としてなすすべもなかった．先生とは郷里も近く，近親感を抱いていたが，接するにしたがい，先生の深い学識と温かい人間性に触れ次第に敬愛の念を持つに至った．何よりも現代美術についてお互いに共感するところが多く，クレーについてはこれからさらに深くお話しをうかがおうとする矢先のところで，この訃報に接した．私はただただ吐息をつき絶句するのみである．「探求の画家パウル・クレー」はかくして先生の絶筆となった．謹んで御冥福を祈る．嗚呼．　1989年12月4日